

10課

9月4日

安息日の休み



安息日午後 8月28日

暗唱聖句

六日の間は仕事をしなければならない。第七日は全き休みの安息日であり、聖会である。どのような仕事もしてはならない。これはあなたがたのすべてのすまいにおいて守るべき主の安息日である。(レビ記 23:3、口語訳)

六日の間仕事をする。七日目は最も厳かな安息日であり、聖なる集会の日である。あなたたちはいかなる仕事もしてはならない。どこに住もうとも、これは主のための安息日である。(レビ記 23:3、新共同訳)

今週の聖句

創世記 1:26, 27、創世記 9:6、2ペトロ 2:19、ローマ 6:1~7、
出エジプト記 19:6、ヨハネ 5:7~16

今週のテーマ

私たちは、第七日安息日を守ることに對するありとあらゆる議論を耳にします。イエスが安息日を日曜日に変えたとか、イエスが安息日を廃止したとか、パウロが廃止したのだとか、弟子たちが、復活を記念して第七日安息日を日曜日に移したのだとか、まさに何でもあります。近年見られる、もっと洗練された議論の中には、イエスが安息日の休みそのものであるから、第七日だろうと、どの日だろうと日を聖別して守る必要はないとする考えです。さらにいつでもおかしな議論があるもので、第七日を休むという行為は、何とかして天国に行こうとする「働き」だという考えまであります。

一方、あるクリスチャンたちは休みという考え、あるいは休みの日に強い関心を持ち、聖書から休みやその重要性について書いている聖句を拾い集めては、その日は日曜日だと論じたり、いや曜日は関係ないと主張したりするのです。

もちろん、セブンスデー・アドベンチストとして私たちは、神の道德律の永続性を理解し、律法が命じるように第四条に従うのですが、それは第五条、第六条、第一条やその他のほかの戒めに従うことよりも重要な、天国に行くための努力ではないことも理解しています。

今週私たちは、神が安息日の戒めの中に与えてくださった休みについてさらに学び、またそれがなぜ重要なのかについて考えます。

十戒の中で、第四条だけが「覚えて」（口語訳）という文節を伴っています。「盗んではならないことを覚えて」とも、隣人の家を欲してはならないことを覚えて」とも言われてはいません。「安息日を覚えて」だけなのです。

「覚える」〔英語では「思い出す」〕という概念は、過去の出来事を、つまり、私たちが覚えておく必要のあることが過去に起きたことを前提とします。私たちは何かを思い出すとき、過去の記憶をたどります。ですから、「安息日を覚えて、これを聖とせよ」との戒めは、創造週そのものを前提としているのです。

問1 創世記1：26、27と9：6を読んでください。これらの聖句は、私たち人類がどれほど特別な存在であるか、神が創造されたほかのものと、どれほど決定的に違っているかについて何を教えていますか。そして、この違いを理解することは、なぜ非常に重要なのでしょうか。

私たちが天地創造を思い出すとき、私たちは神の御像^{みかたち}に造られた者であることを思い出します。天地創造の物語の中で描かれたほかの何物にも与えられなかった特権を思い出すのです。人類がいかに多くのDNAをほかの動物たちと共有しようとして、私たちがほかの被造物と決定的に違っていることは明らかです。さらに、一般的な通念とも異なって、私たちは単に進歩した猿でも、原始の霊長類が高度に進化したものでもありません。神の御像に造られた人間として、私たちはこの世界に神が創造されたすべてのものの中で唯一無二の存在なのです。

問2 天地創造の物語は、私たちの創造との関係をどのように思い起こさせますか（創2：15、19）。

神が私たちの世界を創造されたことを理解することは、創造時に私たちに与えられた責任をも思い起こさせます。私たちは、被造物を「治め」なければならないのです。治めることは利己的な搾取^{せつと}を意味しません。私たちは、神の統治者として治めねばなりません。私たちは神がされるように、この自然界と交わらねばなりません。

罪はすべてを呪い^{ののし}、混乱させましたが、この地球はなお神の創造物であり、私たちにはこれを不当に搾取する権利はありません。特にしばしば地上に見られる、ほかの人類に危害を与える権利はないのです。

安息日を守ることは、創造主としての神をあがめる以外に、地球環境を守る私たちの責任についての自覚をどのように促しますか。

先に学んだように、安息日は単に創造の6日間以上のものを指し示します。イスラエルが二度目に十戒を聞いたとき、モーセは彼らに荒野での40年を思い出させました。ここで安息日を聖別する理由として語られているのは、天地創造ではなく、エジプトでの奴隷と束縛からの解放でした(申5:12~15)。

今日、私たちはエジプトの奴隷ではありませんが、だれもがもう一つの奴隷制度に直面しています。

問3 今日私たちが直面している、もう一つの奴隷制度とは何でしょうか(創4:7、ヘブ12:1、2ペト2:19)。

安息日は、私たちが束縛するすべてのものからの自由を祝う日です。自分の力によらず、信仰を通して与えられる神の力によって、罪から自由にされることを安息日に思い出すのです。この自由が私たちの功績によるものではないことも思い出します。イスラエルの出エジプト前夜、戸口に小羊の血を塗ることによって長子が救われたように(出12章)、私たちも神の小羊の血によって救われた今、キリスト・イエスにあって私たちのものとなった自由の内を歩むのです。

問4 ローマ6:1~7を読んでください。パウロはここで、私たちが安息日を通して与えられるものについて、どのように語っていますか。

申命記5:15の尊い言葉に、「あなたがかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない」とあるように、イスラエルの民は再度、エジプトからの救出は、彼らを救うための神の御業と御力であったことを思い出すのでした。だとすれば、私たちはクリスチャンとして、私たちが罪から救うキリストの御業と御力をどれほど深く理解するべきでしょうか。

このみ言葉は私たちに、神の力強い御腕によって私たちのものとなった救いの内に休むよう命じています。私たちは、神が創造主であることを覚え、神が私たちが再創造してくださることを信じ、今日でさえ、私たちが望みさえすれば、主が私たちの内に働いて私たちが罪の縄目から解放してくださることを信じる時、私たちは自分の力で義を得ようとする思いから解放されるのです。

あなたは、罪の奴隷となったどのような経験がありますか。私たちはどのようにして、イエスによって奴隷状態からの解放がすでに与えられているとの約束にふさわしい者となることができるでしょうか。

問5 出エジプト記19:6を読んでください。古代イスラエルの身分について、どのように語っていますか(1ペト2:9参照)。

イスラエルは、神の契約の民としてエジプトから呼び出され、忠実であったならば、この国を通して福音が世界に伝えられるはずでした。神の特別の守りと配慮の対象であり、特別な特権と共に特別な責任を与えられていました。

問6 出エジプト記23:12を読んでください。神がイスラエル以外の人々をどのようにご覧になっているかについて、何を教えてください。

多くの人々は、安息日の普遍性を見過ごしています。もちろん、最もよく見られる誤りは、安息日はユダヤ人だけのものではあったとする考えですが、この考えが誤りであることは、創世記の最初の2章で明らかです。神は「最初の人類を創造することによって」全人類を創造されたのですから、全人類が安息日を覚えるべきなのです。私たちは、安息日が私たちに提示することを常に心に留めるべきですが、同時に、安息日が他者をも含んでいることを覚えるべきです。私たちが、創造主であり贖い主であるお方との関係の中に休むということは、自動的に、私たちが新しい目で他者を見るようになることを意味します。すなわち、私たちが造られた同じ神によって造られた存在、私たちが愛しておられる同じ神に愛されている存在、私たちがそうであるように、神が命をお捨てになったほどにかけがえのない存在として彼らを見るようになるのです。すでに学んだように(出20:10、申5:14)、僕(奴隷)、外国人、そして家畜さえも、安息日の休みが与えられねばなりません。

彼らの門の内にいる見知らぬ人、イスラエルに与えられた契約の約束に(まだ)あずかっている者たちであっても、安息日の休みを同じように楽しむべきです。人類はもちろん、動物たちでさえ、搾取されたり、虐待されたり、支配されたりしてはなりません。毎週、ヘブライ人は、(そして私たちも)自分たち以外の人々と多くの共通点があることを思い起こさねばなりません。ほかの人々にはない祝福と特権にあずかっている、私たちは同じ人類家族の一員であることを忘れず、ほかの人々に敬意と尊厳をもって接するのです。

どうすればあなたは、安息日を守っていない人々に祝福となるような安息日の守り方ができるでしょうか。それは、あなたがどのように安息日を他者へのあかしとして用いることができるかということです。

新約時代の宗教指導者たちは、安息日を守ることに関しては名人でした。安息日を聖く守るために、何十もの禁止事項や規則が定められていました。

これらの禁止事項の中には、結ぶことやまとめること、糸をほどくこと、火を消すこと、私有地から公の場所へ物を移動すること、公の場所で一定以上の距離に物を運ぶことなどが含まれていました。

問7 ヨハネ5：7～16では、イエスに対してどんな訴えがなされていますか。

指導者たちは、イエスがこの男にお与えになった長年の病気からの自由と驚くべき奇跡を完全に無視し、癒やされた男が安息日に床を担いだことを問題にします。指導者たちは、「安息日の主」であるお方が（マコ2：28）、この特別な日をどのように活用されたかを見ないで、自分たちの規則と禁止事項を守ることしか目を向けませんでした。私たちも、自分の考え方や状況判断の中で、同じような過ちに陥らないように注意する必要があります。

問8 イザヤ58：12～14で神は、安息日を守るために、どのようなことを求めておられますか。

神は、空虚な礼拝や敬虔な沈黙を望まれません。神は、神の民がほかの人々と交わること、特に、虐げられている人々、社会の周辺に追いやられている人々に仕えることを望んでおられます。

イザヤはイザヤ58：13、14で、これをはっきりと述べています。『もし安息日にあなたの足をとどめ、わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日となえ、これを尊んで、おのが道を行わず、おのが楽しみを求めず、むなしい言葉を語らないならば、そのとき、あなたは主によって喜びを得、わたしは、あなたに地の高い所を乗り通らせ、あなたの父祖ヤコブの嗣業をもってあなたを養う』。これは主の口から語られたものである（イザ58：13、14、口語訳）。

英語の新改訂標準訳聖書（NRSV）は、自分の「楽しみ」（イザ58：13、口語訳）を追い求めることと、「安息日を踏みにじること」（口語訳では、「安息日にあなたの足をとどめ」ないこと）を同等のこととして訳出しています。人間の計画は、神が理想とされる安息日には含まれません。むしろ私たちは、苦しんでいる人々、束縛されている人々、空腹で裸の人々、暗闇の中を歩み、その名をだれからも忘れられている人々に仕えるように招かれているのです。週のほかのどの日にも増して、安息日こそ、自分を忘れ、利己心を捨て、もっと他者のことを考え、自分の必要よりも他者の必要に心を向けるべき日なのです。

第二次世界大戦中、イギリスにドイツ軍による侵攻が差し迫っていました。この島国を守るために、できる限りの準備がなされました。海岸沿いに要塞が築かれ、敵にとって目標に最短ルートになるため、道路は要所要所で封鎖されました。さらに、イギリス当局は変わった策を講じました。敵の侵攻を遅らせるために、鉄道や道路の標識を取り除いたのです。石に刻まれたものや建物に書かれたものは、上からセメントで塗りつぶされました。

標識には意味があります。道しるべとして旅人を導きます。まだGPSのない時代には、私たちはみな、地図と標識を頼りに旅をしました。

問9 安息日は何のためのしるしでしょうか（出31：13、16、17）。私たちはここで言われていることを、どのようにして私たち自身に、現代に、そして神の律法の永遠性を信じている人々に適用できるでしょうか。

これらのみ言葉は、実際には古代のイスラエルに語られたものですが、キリストのものである私たちは、「アブラハムの子孫であり、約束による相続人」です（ガラ3：29）。安息日は今日も、神と神の民の間のしるしなのです。出エジプト記31章は、安息日は神の永続的な（または永遠の）契約のしるしであると指摘しています（出31：16、17）。このしるしは、私たちが、私たちの創造主を、私たちの贖い主を、そして私たちの罪を清めてくださるお方を「知る」助けとなるのです。それはまるで、忘れっぽい私たちのために、七日ごとに掲げられ、あることを思い出させてくれる旗のようです。

神の安息日は、常に、私たちの起源を、私たちの解放を、私たちの運命を、そして社会から見捨てられ、周辺に追いやられている人々に対する私たちの責任を思い出させてくれます。事実、安息日はあまりに重要なので、私たちがそこに行く代わりに私たちのところにやって来て、毎週例外なく、私たちがだれなのか、だれが私たちを造られたのか、神が私たちのためにしてくださったこと、そして、神が新しい天と地を造られるときに、最終的に私たちのために何をしてくださるかを思い出させてくれるのです。

聖なる神は、その契約のパートナーである人間に、真に意味のあること、すなわち、創造主であり贖い主であるお方と、そのわがままで強情な被造物との間の救いの関係を指し示す、神のリズムを思い起こすように招いておられます。私たちは毎週、神からの権威と力によって、「御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないうで十字架の死を耐え忍」ばれた「信仰の創始者また完成者であるイエス」（ヘブ12：2）にあって、惜しげもなく与えられている休みに入るよう命じられているのです。

あなたは安息日より深い経験に入るために、何を知る必要があるでしょうか。

「私たちは、1週間を通して安息日を心に留め、戒めの通りに守るために備えをしなければならない。私たちは、安息日を単なる律法の要求として守ってはならない」(『教会への証』第6巻353ページ、英文)。

「全天は安息日を守っている。しかし、それは気のない、何の活動もしない守り方ではない。この日には、魂のあらゆるエネルギーが目覚めなければならない。なぜなら、この日は、神と救い主なるキリストにお会いする日だからである。私たちは彼を信仰によって見上げる。そして彼は、すべての魂に活力を満たし、祝福したいと切に願っておられる」(同362ページ)。

「安息日には、神に対する要求は、ほかの日よりも大きい。この日には、神の民は、いつもの仕事をやめて、瞑想と礼拝に時を過ごすのである。彼らは、安息日にはほかの日よりももっと多くの恵みを神に求める。彼らは神の特別な関心を要求する。彼らは神の最上の祝福を切望する。神は、安息日が過ぎるのを待たないで、こうした願いにお答えになる。天の神の働きは決してやむときがない。人間もよいことをするのを休んではならない。安息日は何の活動もしない無益な日として与えられているのではない。律法には、主の休みの日に世俗の仕事をするのを禁じてある。生活費を得るための働きはやめなければならない。世俗的なたのしみや金もうけのための働きをこの日にすることは、律法にかなわない。だが神が創造の働きをおやめになって、安息日に休み、これを祝福されたように、人間も日常生活の仕事から離れて、この日の聖なる時間をもつば健康的な休みや礼拝や聖なる行為に用いるべきである。病人をいやされたキリストの働きは、律法に完全に一致していた。それは安息日をとうとぶことになった」(『希望への光』769,770ページ、『各時代の希望』上巻252,253ページ)。

話し合いのための質問

- ① 環境への配慮は、多くの国で無視できない政治的議論の対象です。私たちはアドベンチストとして、政治的な課題としてではなく、どのように自然環境の良い管理者になることができるでしょうか。
- ② 奉仕は心の中から始まります。私たちはどのようにして、私たちの周囲の人々(家族、教会、地域の人々)にもっと熱心に仕える心を養うことができるでしょうか。そのための機会として、安息日をもっと有効に用いることができなでしょうか。
- ③ 安息日ごとに私たちは、全人類が神によって造られたことを思い出します。それは、神の目で人々を見る助けになります。神の御像に造られ、神の愛の対象として人間を見るときに、人種、民族、社会経済、そして性別の違いなどは、すべて意味を持たなくなることを、安息日はどのように私たちに思い出させますか。